

『赤と黒』の創作過程：着想と制作時期の再検証

高木, 信宏

<https://doi.org/10.15017/10037>

出版情報：Stella. 20, pp.1-31, 2001-09-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

『赤と黒』の創作過程

——着想と制作時期の再検証——

高木信宏

『赤と黒』の創造の解明は、スタンダリアンならば誰しものが夢みる仕事であろう。周知のように作品の源泉探求の分野においては、前世紀にベルテ事件とラファルグ事件にかんしてルネ・フォンヴィエーユやクロード・リブランディ等による緻密な研究が集積された。だが他方、創作の経緯に光をあてる試みに目を向けるならば、その成果はけっして芳しいとはいえない。スタンダールが何時これらの事件を知り、執筆を思い立ったのかという点さえも、作家による証言がごくわずかしか残されていないため、それらをもとにいくつかの仮説が提出されたにとどまる。テキストの制作過程についても草稿や校正刷が発見されておらず、事情はさほど変わらない。『パルムの僧院』を対象にするばあいと同様、傑作の生成をめぐる議論はもはや手詰まりになった観すらあるのだ。しかしながら本稿があえてこの問題を取りあげるのは、従来の諸説は一次資料の照合の点でいずれも万全とは言い難く、それぞれに矛盾点が指摘できるからにほかならない。したがって以下の考察においては、これらの再検証をつうじて、『赤と黒』の着想から刊行までの過程を俯瞰する新しい視点の提出を目指す。

1. 1828年のグルノーブル滞在

『赤と黒』の着想から執筆の経過について仮説が提出される際、とりわけ注目されてきたのは『ローマ漫歩』セルジュ・アンドレ本の余白に記されたメモである——「1828年、10月25日から26日にかけての夜、マルセイユでだったと思うが、1830年5月以降『赤と黒』と呼ぶ『ジュリアン』のアイデア²⁾。周知のように、着想の日付を示すと思われるこの記述にかんしてロベール・

ヴィニュロンがスタンダールの記憶違いを指摘した³⁾。ヴィニュロンによれば作家が当地に逗留したのは1829年となる。以来、この推定はアンリ・マルチノやピエール＝ジョルジュ・カステックス等に支持されてきたが⁴⁾、マルセイユ滞在の年号の確定にあたっては次に挙げる作家自身の覚書きも有力な証言であらう――

セート、月曜日から金曜日の晩、すなわち1829年10月16日まで。

22日、マルセイユ発。

24日、土曜日、リヨンにて5時に美しい太陽。

25日、日曜日、汽船。深夜、シャロン着。⁵⁾

イタリア・ルネサンス期の作家マッテオ・バンデッロ著『ノヴェッレ』の余白に残されたこの記述は、1982年の最初の活字化以降、栗須公正によってその重要性が指摘されるまで注目されていなかった⁶⁾。我々としては同メモに残された日付の信憑性を別の角度から確認しておく。それぞれの日付には曜日が添えられているが、暦表で確認できるように1829年10月16日は金曜日であり、メモの各日にちと曜日は見事に一致している⁷⁾。しばしば日付の記憶違いを指摘されるスタンダールであるが、この覚書きにかんしては正確さの点からいって旅行からさほど時を経ずして記されたと思わせるのだ。作家は月曜、つまり10月12日から16日まで南仏の港湾都市セートに滞在し、17日ないし18日から22日までマルセイユにいたことになる。したがって『『ジュリアン』のアイデア』が思いつかれた日にちについても修正を要するのだ。

しかしながら、この余白メモの重要性は年号の問題だけにとどまるものではない。メモの記述内容を信じるならば、スタンダールの旅程にかんする通説が再検討されねばならなくなるのだ。すなわち1829年秋の旅行が、リブルヌ、ボルドー、トゥールーズ、カルカソンヌ、フィゲラ、バルセロナ、モンペリエ、マルセイユ、グルノーブルという道順であったとする説である⁸⁾。ところが同メモによれば、マルセイユを発ったスタンダールはリヨンからシャロンまで航路で北上しており⁹⁾、グルノーブルに立ち寄ったと思わずにはその言及もなく、また日程的に見ても不可能だ。ヴィンチェンツォ・モンティ『ロレンツォ・マスケローニの死を悼んで』への書き込みが「1829年10月29日、パリ」という日付をもち、さらに未完の草稿『噂の人々』の日付が「1829年11

月5日、パリ」であることから考えても¹⁰⁾、10月25日にシャロンに到着した作家は一路パリへと向かったのはまちがいない。旅行後ただちにパリで恋人アルベルト・リュバンプレと再会しなかったのは、到着後間もなく友人アドルフ・ド・マレストと彼女との関係を知ったからとも考えられる。あるいは後述するように短編小説『ヴァニナ・ヴァニニ』の執筆に着手し、『パルムの僧院』執筆時と同様に人づきあいを避けていた可能性もある¹¹⁾。ところでアンリ・マルチノは、作家の帰郷がマルセイユ滞在に先だって行われたのではないかと推測しているが、同説もまた受けいれがたい。なぜならば、スペイン訪問後にスタンダールがモンペリエ、グルノーブル、セート、マルセイユという実に奇妙な迂回路を選んだことになってしまうからだ¹²⁾。

はたしてグルノーブル滞在はじっさいに1829年のスペイン・南仏旅行中にあったのであろうか。そもそもスタンダール自身による明白な証言はいっさい存在しない。これまで帰郷の根拠とされてきたのは、6年後に執筆された『アンリ・ブリュラルの生涯』の3つの記述である。ただし、そのいずれもが滞在を1828年としているのだ¹³⁾。ヴィニュロンの検証によれば、作家が1828年夏から秋にかけてスペイン・南仏を巡るような長期の旅行をしたはずはなく、よって『アンリ・ブリュラルの生涯』のなかでグルノーブル滞在を同年としたのは作家の単なる記憶違いとなる¹⁴⁾。この仮説は現在に至るまで最も有力視されているが、しかしながら、なぜ1829年の旅程のなかにグルノーブルが含まれていたと考えねばならないのか。これとは別に、スタンダールがじっさい1828年に帰郷した可能性も否定できないのではあるまいか。この年号の確定は『赤と黒』の創作とその源泉であるベルテ事件との関係に大きくかかわる問題なので、ここで順を追って検討したい。

まず1828年のグルノーブル旅行の可能性を示唆するものとして、作家の友人であり博物学者のヴィクトル・ジャックモンの証言を挙げておこう。彼が同年7月23日、同じく作家の友人であるイギリス人弁護士サットン・シャープに宛てた書簡のなかに次のような興味深い一文がある——「われらの気高い友人、ド・スタンダール伯爵はいまだに彼の領地 *ses terres* に向けて出発していません¹⁵⁾。いうまでもなくスタンダールは貴族の出ではない。また「領地・地所」を持てるような経済状況にもなかった。だが「*terre*」の語義は「生まれた土地」も排除しまい。彼が同年1月に第2の〈母国〉、すなわちミラ

ノからパリに戻ったばかりであることを思い起こすならば、貴族的な偽名にひっかけて言及されているのは、むしろ故郷グルノーブルの方だと考えられる。つまりジャックモンの手紙から、この夏スタンダールが周囲の友人たちに帰郷の計画を話していたことが推測できるのである。

当時グルノーブルだけを目的とした旅行ならば、全日程としてはおよそ10日間もあれば充分ではなかったろうか。パリ・グルノーブル間の往復に6日、当地滞在に4日という計算である。これは当時の交通機関の状況から見てもけっしてありえない数字ではない。たとえば1830年11月6日、トリエステに向けてパリを出発したスタンダールは汽船を使い、わずか2日間でリヨンに到着している。陸路のばあいでもディリジャンスではなく郵便馬車を用いれば、パリ・リヨン間はほぼ同じ日数である¹⁶⁾。次に1828年当時の作家の経済状況であるが、リリー・フェルバークの検証によればスタンダールは終身年金と軍人年金の計2050フランにイギリスの雑誌からの稿料3600フランの一部を受けとっていた¹⁷⁾。たしかに不安定な収入状況ではあるが、フェルバークが述べるようにけっして困窮していたわけではないのだ。しかも万一のばあいに備えてどれほどかの蓄えもあったはずである。

ではジャックモンの書簡以降、スタンダールはいつ故郷にむけて旅立ったのだろうか。実はヴィニュロンも認めるように作家のパリでの足跡がたどれない空白期間が9月末から10月末にかけて存在するのだ¹⁸⁾。それは「ニュー・マンスリー・マガジン」誌への2つの寄稿執筆の日付、すなわち「1828年9月23日」から「1828年10月24日」までの期間である¹⁹⁾。発信地パリと記載されたいずれの記事も3頁ほどの短いレポートであるが、後者の内容は10月に上梓されたミシェル・レイモン『石工』など数冊の新刊本についての書評を含む。だからといって、これらの発刊日にスタンダールがパリにいたとはかならずしもいえない。なぜならば、たとえ彼が10月1日に故郷へ出発したとしても「10月24日」の1週間前にはパリに戻れたはずで、旅行後に記事を準備・執筆する時間的な余裕が充分にあったと考えられるからだ。したがって、作家が9月末から10月半ばまでの間にグルノーブルへ小旅行をした可能性はスケジュールの点でも否定できない。

この「小旅行」にかんしては、スタンダールの親戚であり、終生変わらぬ友人でもあったロマン・コロンの証言がきわめて示唆的である。コロンは後年

『スタンダール略伝』のなかで作家から聞いたグルノーブル滞在のエピソードを次のように紹介している――

しばしばペールは生まれ故郷の町のことを蔑み嘲りながら話したものである。だが、彼独特の例の突飛さから、2、3年ごとにドフィネの美しく優雅な山々を見たくてたまらなくなるのだった。彼がグルノーブルにちらっと現れたのは、毎回それが目的だった。そうした滞在のうちのひとつ、すなわち1824年10月に、彼はクレにある父親の旧地所のまわりをうろついていた。葡萄畑の収穫が行われており、彼はかつて自分が味わっていた葡萄を食べたくなかった。しかしこの激しい欲望を満たそうにも、彼の当惑は大きかった。というのも、なにをおいてもまず自らの身分を絶対に隠し通さねばならなかったからである。²⁰⁾

今日このエピソードはじっさいには1824年ではなく、1829年の出来事と考えられているが²¹⁾、ここではそのような年号の問題はさておき、コロンの証言内容をつぶさに見ていくことにしよう。まず帰郷の目的がドフィネの山々のなす景色の観賞である点で、作家がシェリーやバイロンの同時代人であることをあらためて思い起こさせる。だが我々にとってはほかに重要なのは、そうしたグルノーブル行きが数年おきに行われた、いわば習慣化した行動として認知されていたという事実である。しかも「courte apparition à Grenoble」とあるように同種の滞在がごく短期間のものであるばかりか、自らの身分をひた隠す微行であったという言及も無視できない。というのも従来の研究ではこれらの特徴がほとんど看過されてきたからである。だが『アンリ・ブリュラルの生涯』第15章の余白への書き込みと照らし合わせるならば、コロンの証言の信憑性はいっそう高まるのだ――「アイデア。グルノーブルに3日間過ごしに行き、そして3日目にだけクロゼに会うこと。/ただ独りお忍びでクレ、バステュー、ラ・トロンシュに行くこと」²²⁾。1835年12月に書かれたこのメモの記述からは、自伝執筆中にグルノーブル行きが突然思いつかれたという印象をうけるが、それ以上に見過ごせないのは旅行の日程がやはり3日間という短期間であり、かつお忍びの単独行動である点にほかならない。すなわち旅行の性格がコロンの証言と見事に符合するのである。この旅行の計画にかんしてヴィクトル・デル・リットは、問題となるドフィネ旅行はおそらく1829年に済んでしまっているのだから「奇妙なメモ」だと疑念を表明している²³⁾。つま

りこの余白メモの記述とコロンの証言のいずれもが、推測上の「1829年のグルノーブル滞在」にかんする言及であると見なされてきたのだ。だが、はたしてそうであろうか。コロンの回想するように同種のグルノーブル滞在が幾度となく繰り返されたのならば、むしろ前掲メモの存在もむしろ辻褃があうのではあるまいか。すなわちコロンの証言は、スタンダール研究者の把握していないドフィネ小旅行がほかにもまだ存在する可能性を示しているのである。

しかも『アンリ・ブリュラルの生涯』の余白メモに登場する地名は、帰郷の目的についても示唆をあたえてくれる。クレはグルノーブル近郊の小村である。スタンダールの父シェリュバン・ベールは当地に別荘と地所をもっていた。『アンリ・ブリュラルの生涯』第9章で語られているように、そこは8月と9月に家族で休暇をすごした思い出ぶかい場所なのである²⁴⁾。たとえば1800年9月28日、イタリア遠征軍の騎兵少尉となったスタンダールは、ミラノから妹ポーリーヌ・ベールに宛てた手紙のなかでそのようなクレでの夏の生活を懐かしく思い描いている――

今頃、彼女〔ポーリーヌ〕はフェリシー、カロリーヌ、ガエタンたちと一緒にクレにいるんだらうな、と僕は独りつぶやく。〔…〕僕にはここからでも、おまえが囲いの小さな扉をくぐりぬけ、ルーヴァット家の葡萄の小木のところにもその実を食べに行くのが目に浮かぶ。〔…〕また別の日には、おまえはパパと一緒にドウィアチェールに散策にでかけて、そこからクレの平野の見事な眺めや、遠くの山々と谷底のなす魅力的な眺望に感嘆するのだね。²⁵⁾

一方、バステューの方は中央学校時代の友人フランソワ・ビジリオンの思い出と結びついた場所である――「とりわけラボの塔とバステューの方に行った。とくに背後にアルプス最高の峯々がそびえるエーバンの方を眺めると壮大な景色があって、それが私たちの魂を高揚した」²⁶⁾。これらの記述を読むならば、「ドフィネの美しく優雅な山々」への憧憬にかんするコロンの証言に作為や誇張を認めることはできまい。ドフィネの高峰があたえる崇高な情感こそ、最も象徴的にグルノーブル行きの目的を説明するのではあるまいか。スタンダールはグルノーブルへお忍びで帰郷するたびに、誰にも邪魔されることなく少年時代の特権的な思い出の場所を散策し、幸福感に存分にひたることができたのにちがいない。

ところでポーリーヌ宛の書簡は、コロンの語るエピソードの別の重要性も示してくれる。それはスタンダールのブドウに対する嗜好である。おそらくこの果物はその食味のみならず、クレでの夏の思い出を鮮やかに蘇らせるという意味では特権的な食べ物だったのではなかっただろうか。おそらくリュバンプレ夫人に宛てたと思われる1831年8月11日付の手紙に、「レジネ男爵 Baron Raisinet」という偽名の署名を残している事実に窺い知れるように²⁷⁾、親しい友人たちにも作家の嗜好は知れ渡っていたにちがいない。ちなみにフランソワ・ミシェルはチヴィタ＝ヴェッキアのフランス領事館で働いていたアントワヌ・アリベールの息子を1936年に取材訪問し、スタンダールが好んでブドウを食べていたという逸話を確認している²⁸⁾。

1828年9月末から10月半ばにかけてグルノーブルへの「小旅行」が行われたのならば、ちょうど当地のブドウ収穫の季節と重なる²⁹⁾。追憶にひたるには最良の時期であろう。そればかりではない。ジャックモンがシャープに「彼の地所」と記したのも、クレにあるベール家の旧地所が念頭にあってのこととは考えられまいか。思い出の場所へのスタンダールの微行は親友たちにはよく知られた行動だったにちがいないのだ。

とはいえ1828年のグルノーブル滞在の目的がこのようなノスタルジーだけによって説明されるわけではない。この年、作家の関心をグルノーブルに向けさせる重大な出来事があった。中央学校以来の旧友フェリックス・フォールが、同年4月22日に行われたヴィエヌの補欠選挙で代議院議員に選ばれたのである。当選を知ったスタンダールの喜びの大きさは、彼がフォールにただちに手紙を送った事実に端的に示されている。この4月25日付書簡の文面についてジャック・フェリックス＝フォールは、冷えきった友情復活を願う作家の熱意を指摘しているが、もちろんその点に異論はあるまい³⁰⁾。前年末の選挙でユルトラのヴィレール内閣から中道右派のマルチニャック内閣へと政権が移行した。1828年2月22日付フォール宛書簡のなかでスタンダールは選挙後の代議院の現況を子細に説明し、「今年任命された自由派の代議士の大半は間抜けだ」と人材不足を嘆いていただけに³¹⁾、自由派の新人としてデビューするフォールへの期待の高さは想像に難くない。このような作家の心情を考慮するならば、その年のうちに彼がグルノーブル近郊のサン＝ティスミエにあったフォール家の別荘を訪ねたとしてもなんら不思議はあるまい。そうだとするな

らば、『アンリ・ブリュラルの生涯』第10章で語られる彼らの再会の年号は
 けっして間違っていないのではあるまいか——

フェリックス・フォール氏、貴族院議員、裁判所長官は、1828年夏、サン＝ティスマイエで自分の息子にルイ16世の死についてこう言った。「彼は悪人どもによって処刑された」。これが今日貴族院で4月の陰謀者たちと呼ばれる年若い尊敬すべき狂人たちを処罰しているのと同じの人物なのだ。私なら、この連中をシンシナティに居住1年の罪に処し、その期間、彼らに月200フランあたえるだろう。³²⁾

スタンダールの期待が大きかっただけに、フォールのこの反動的な言葉はいっそう深く記憶に刻み込まれたのではなかったか。おそらく再会は政治的な見解の齟齬に終わったはずだ。なぜならば当時、自由派といえどもけっして一枚岩ではなかったからである。1828年2月22日付のフォール宛書簡のなかでスタンダールが説明しているように、自由派の陣営は3つのグループに分かれていた³³⁾。フォールはといえば登院後ただちにロワイエ＝コラルの穏健な立憲王政主義に組みしてしまう。それに対してスタンダールの方は、ラ・ファイエットの共和主義・反＝教権主義を強く支持していた。このような2人では政治的理想について見解の一致はむつかしく、いずれ政治的な食い違いが表面化するのは時間の問題だった。1832年にフォールがルイ・フィリップ治下の貴族院議員になって以後、彼らが再び政治的に接近することはなく、また青春時代のような友情の復活も確認されてはいない。

ここで指摘しておかねばならないのは、このサン＝ティスマイエでのフォールとの再会が1829年の南仏旅行の期間中にはありえない事実である。1829年8月、穏健王党派のマルティニャック内閣から過激王党派のポリニャック内閣に政権が移った。同じ月、ラ・ファイエットは故郷オーヴェルニュ地方を皮切りに、グルノーブル、リヨンと周遊し、各地で自由派の熱烈な歓迎を受けている。8月18日、グルノーブル近郊のリーヴで将軍は代議士オーギュスタン・ペリエ等に迎えられた。この時、フォールは歓迎晩餐会の主催者になるのを断っているが、宴には一応出席している。つづいてフォールは9月7日、リヨンでのレセプションにも出席後、当地からそのままパリへ赴く。首都でのフォールはロワイエ＝コラルやジェラルド将軍らを訪問し、オーギュスタン・ペリエに彼らの動向について報告している。注目すべきことにその書簡の

日付は1829年9月26日となっているのだ³⁴⁾。つまり同年9月8日にボルドーへ向けてパリを出発したスタンダールが、トゥールーズ、カルカソンヌ、バルセロナと巡っている頃、フォールはずっとパリにいたのである。しかも同年10月からの3カ月間、彼はイゼール県のとおり、オート＝ザルプ県の県庁所在地ギャップで重罪裁判に従事していた³⁵⁾。グルノーブルとギャップとの距離は約80キロメートル。したがって問題の時期、グルノーブルでの2人の再会はけっしてありえないのだ。それに対して1828年の第4四半期、すなわち10月からフォールはグルノーブルの重罪裁判所で審判を司っていたのである³⁶⁾。

以上の状況から考えて、政治的な関心からスタンダールがサン＝ティスミエで代議士フォールと会ったのは、1828年9月末ないし10月初旬であるのは間違いない。附言するならば、経済状況に不安をおぼえていた作家が旧友に対して就職の口添えを依頼する一幕もあったのではないか。というのも同年7月1日に陸軍主計官補の休職手当（年額900フラン）が停止された後、スタンダールは求職活動を続けていたが、芳しい成果をえられなかったからである³⁷⁾。そのようなおり、司法官で代議院議員という社会的な有力者フォールのつてを頼ることは充分ありうる。同年4月に代議士となったフォールは首都へ上っているが、彼がただちに旧友のもとを訪れた形跡はない³⁸⁾。スタンダールの方もパリ滞在中のフォールと再会する機会がえられなかったようだ。むろん就職問題が10月にサン＝ティスミエを訪問する第一目的であったとは考えにくいが、フォールに対して就職の斡旋を依頼していた事実は、翌年2月9日付のエドゥアール・ムーニエ宛の書簡に明らかであろう³⁹⁾。問題は依頼の時期である。旧友アメデ・ド・パストレがスタンダールに就職の紹介するために手紙で会見を申しこんだのが1828年9月25日であることから考えて、この日付よりも後であった可能性が高い⁴⁰⁾。つまりパストレの奔走が実を結ばなかったからこそ、フォールに依頼したと思われるのだ。

フォールとの再会に先立つ1828年9月2日、スタンダールはクレマンチヌ・キュリアル夫人との恋の破局を回想し、さらに翌日、翌々日とつづけて遺書を書いている。スタンダールの暗澹とした精神状態が窺い知れるが、そのような内的な背景も1828年10月のグルノーブル旅行にはあった。ドフィネの崇高な自然美を求め、自ら進んで旧交を暖めようとしたのは、なによりも閉塞状況を打開しようとする心の動きであったにちがいない。だが、おそらくは

落胆に終わったフォールとの再会のためであろうか、思い出の地もそのような憂鬱の特効薬とはなりえなかった。同年11月14日と15日、パリでスタンダールはふたたび遺書を作成することになる。

『アンリ・ブリュラルの生涯』のなかで言及される1828年のグルノーブルの滞在の可能性について検証を試みてきたが、現状では作家の証言を否定する資料は見あたらず、もはやその信憑性は疑えない。従来考察において1829年の南仏旅行にグルノーブルが含まれると推測されてきたのには、ひとつの根強い見方が影響していた。すなわちスタンダールが生地でベルテ事件を知り、それがマルセイユでの『赤と黒』着想の契機となったという推測である。しかしながら1829年のグルノーブル滞在を示す根拠がなくなった以上、かかる仮説は成立しえまい。マルセイユで『ジュリアン』のアイデアを思いつぐずっと以前に、スタンダールはまちがいなくベルテ事件を知っていた。『アンリ・ブリュラルの生涯』の証言のとおりドフィネ旅行が1828年、おそらくは9月末から10月半ばまでに行われたのならば、この時アントワーヌ・ベルテの一件を耳にしなかったはずがない。刑の執行は同年2月23日。作家が訪れたのは衝撃的な事件の記憶がまだ色褪せてはいない時期である。しかも再会したフォールは問題の時期にグルノーブル裁判所破毀院の裁判官だったばかりでなく、旧友で同僚でもあるリュック・ミシューを介してベルテ事件に通じていた⁴¹⁾。当時の活字メディアを除けば、フォール以上の情報源は想像しがたいのである。

もちろんスタンダールがベルテ事件を知った時期は、もうすこし過去に遡る可能性もでてくる。周知のように、1828年2月29日付の「ガゼット・デ・トリビュノー」紙にアントワーヌ・ベルテの死刑にかんする報告が掲載された。冒頭に「グルノーブルの軍事広場」の文字がおどるこの短い記事が⁴²⁾、はたして作家の目を引きつけなかったであろうか。ここで思い起こさねばならないのは、新聞に涉猟した題材から犯罪の物語をつくるという前年6月付の覚書きの存在である。情報源のなかでもとりわけ作家の注目度の高かった新聞こそ、「ガゼット・デ・トリビュノー」紙であった⁴³⁾。1828年1月29日にイタリアから帰国後も、ひきつづき同紙にそのような関心が向けられていたことは充分ありうることだ。というのは、「ニュー・マンズリー・マガジン」誌への同年3月17日付の寄稿のなかで、スタンダールが読者に対して「ガゼット・デ・

トリビュノー」紙を短く紹介しているからである⁴⁴⁾。かりにそうだとするならば、ベルテ事件への興味もまた、1828年秋のグルノーブル小旅行の動機に数えることができようか。

2. ベルテ事件から創作へ

ではスタンダールとベルテ事件との出会いが1828年秋であるという自説にもとづき、『赤と黒』の創作過程を再検討していこう。まず注目されるのはロマン・コロンの次の証言である――

1年以上前から私は、表紙に大きな文字で『ジュリアン』と書かれた草稿がペールの机の上にあるのを目にしていた。私たちはそれを話題にすることはなかった。1830年5月のある朝、突然彼はある話を途中で打ち切り、私にむかって、「これを『赤と黒』と呼んではどうだろうか」と言ったのである。それまでの話題とはなんの脈絡もない、この呼びかけの意味がさっぱりわからず、私は彼にその説明をたのんだのだった。だが彼の方は自分のアイデアに気を取られていて、「そうだ、これを『赤と黒』と呼ばなければ」と返事をしたのである。そして草稿をつかむや、『ジュリアン』という題名をその題名にかえたのだった。⁴⁵⁾

カステックスの見解に代表されるように⁴⁶⁾、「1年以上前から」というコロンの証言はこれまでは不正確なものと思われてきた。とういうのも、作家がベルテ事件を知ったのは1829年秋であり、『赤と黒』の着想もこの時だと推測されてきたためである。しかしながら、すでに1828年10月半ばにスタンダールがベルテ事件について情報をえていたと推定できる以上、このコロンの証言は申し分なく尊重に値するのではあるまいか。つまり1829年の春にベルテ事件に想をえた『赤と黒』の最初の下書きが作られていたと考えてもすこしも不都合はないのである。

このことは、次にあげるスタンダール自身のメモの記述と照らし合わせるならばいっそう説得的になろう――「マルセイユで『ジュリアン』を脚色したように、この物語をアレンジすること *Arranger cette histoire comme j'arrangeai Julien à Marseille*」⁴⁷⁾。ここで強調しておかねばならないのは、引用箇所における「arranger」という動詞の2度にわたる使用である。それ

を文字通りに解するならば、メモの真意は1829年10月にマルセイユで初めて『ジュリアン』という創作に着手したのではなく、すでに存在していた同名の草稿にその時点で手を加えたという謂いにほかなるまい。そればかりか、この覚書きが残された場所が、未定稿『社会的地位』（1832年）のなかでも最終頁の余白である事実もきわめて示唆的であろう。物語の途中でアイデアに苦しんだ作家が、類似した状況におけるかつての成功例を想起していることが窺い知れるからである。さらに同様の指摘が、1837年4月に着手された中編小説『バラ色と緑』の創作についてもできるのだ。同年の6月8日、完成を見ずにこの小説の執筆は放棄されてしまうのだが、それに先立つ6月2日にスタンダールは到着したばかりのナントで次のように記している——「私にとってナントが、『赤』にとってのマルセイユと同じものになるのを期待している」⁴⁸⁾。いずれの例も執筆が行きつまった状況下で書かれている事実を考慮するならば、もはや『赤と黒』の創作におけるマルセイユの役割は明らかであろう。先に見た『ローマ漫歩』セルジュ・アンドレ本の余白に記された「『ジュリアン』のアイデア」とは、これまで推測されてきたような『赤と黒』の最初の着想ではなく、既存草稿の物語に大きな展開をもたらすアイデアを、スタンダールがマルセイユにおいて得たことを示しているのである。

問題はマルセイユで書かれた下書きの概要である。『リュシアン・ルーヴェン』の草稿の余白には、「マルセイユの草稿はあまりにも短かったので、『赤』を印刷する時に内容を増やさなければならなかった」と記されている⁴⁹⁾。スタンダールのマルセイユでの滞在日数は最大に見積もっても6日であるから、メモの記述のとおりごく短い草稿だったのであろう。作家は1830年の冬、おそらくは1月から3月にかけての期間、パリの貴族青年を考察している⁵⁰⁾。これはカステックスがいみじくも指摘したように⁵¹⁾、パリを舞台にもつ小説第2部の内容を充実させるための準備作業だったにちがいない。すると「マルセイユ草稿」の契機となった「『ジュリアン』のアイデア」とは、ベルテ事件が提供する物語の枠組に存在しない2つの要素の導入だったとは考えられまいか。すなわちパリの上流社会という舞台背景と主人公の栄達という物語論的なひとつの到達点である。これによって『赤と黒』のテキストは一挙に地理的・社会的な空間を拡げ、〈密書事件〉に代表される同時代の出来事を年代記としていっそう幅広く取りこむことが可能になった⁵²⁾。しかも同時に平民の主人公の性格

設定における野心、あるいはナポレオンに象徴される社会的上昇のエネルギーを筋のなかで十分に展開することができたのである。換言するならば、ジュリアン・ソレルは一個人の特殊なケースを超えて、大革命後の時代にふさわしい理想化された人間精神を体現するに至ったのだ。したがってジャン・プレヴォの指摘するように、『赤と黒』が物語の点で2つの結末——第2部・第34章での従男爵となった主人公の軽騎兵中尉任官と第2部最終章における主人公の処刑——をもった背景には⁵³⁾、ベルテ事件のシナリオにパリの上流社会での成功という『『ジュリアン』のアイデア』が後から加わったという創作事情が反映されていると考えられる。

マルセイユの「アイデア」は、第2部で登場するヒロイン、マチルド・ド・ラ・モール的人物造型とも無関係ではあるまい。おそらく『ジュリアン』という当初の草稿においては、ベルテ事件のアンリエット・ド・コルドンをモデルに人物像の原型が造られたはずである。12世紀以来つづく名門地方貴族の家に生まれた彼女は、兄弟の家庭教師と父コルドン伯爵の秘書を兼ねていたアントワヌ・ベルテと恋におち、その子供を身籠もった。これらの要素は『赤と黒』の物語のアウトラインにそのまま残されているが、しかし彼女のじっさいの人物像となるとほとんど未詳である。わずかに伝えられるところによれば、この18才の少女はいたって感じやすく感傷的な娘であつたらしい⁵⁴⁾。彼女がベルテに惹かれた動機も、ミシュー夫人との別離のために悲嘆にくれていた彼女の姿だったというから、マチルドとはおよそ異なるタイプだといえる。スタンダールはフィレンツェの総合文芸雑誌「アントロジア」のためにみずから執筆した『赤と黒』の書評原稿のなかで、マチルドがジュリアンに関心をもつ経緯を次のように説明している——「生粋のパリ娘だから、彼女は彼をじらす。父のお気に入りのひかえめな態度は、彼女にはほとんど軽蔑と見える。彼女には、それがただ自尊心から、軽蔑されるのを恐れる心からきたものにすぎないということがわからない。ラ・モール嬢の極度の虚栄心は、なんとかしてジュリアンの心の平静を乱そうとします」⁵⁵⁾。とうぜんのことに、このようなパリの若い貴族女性という側面が強く意識されたマチルドの性格設定は、1829年にマルセイユでパリを舞台にするアイデアをえて以降に形成されていったはずだ。しかもそれは2人の対照的なヒロインという、スタンダールの長編小説に不可欠な主題がはじめて実現されるきっかけだった。『アルマンズ』において

アルマンス・ド・ゾヒロフとドーマール夫人との対比は微弱でしかない。『赤と黒』の創作を契機にして、母性的な女性とアマゾン型の女性との象徴的な対照は、独自の文学的手法として一連の創作のなかで意識的に常套化されていったのだと思われる。じっさい1840年10月16日、バルザック宛の手紙の下書きのなかで、1880年になって無数の小説が創作された後で独創的であるためには2人のヒロインが必要であると書かれている⁵⁶⁾。

マルセイユでの「アイデア」に前後する時期、スタンダールは『ヴァニナ・ヴァニニ』を創作した。同短編は『ローマ散歩』の一部となる予定の挿話が構成の都合上、独立して物語化されたものと見なされている⁵⁷⁾。従来考えられてきたように、女主人公のヴァニナはスタンダールの小説のなかでもアマゾン型の最初のヒロインとなるからには、時期を接するマチルドの人物造型ともけっして無関係ではない。2者の性格上の類似は無論のこと、主題やプロットのレベルでも共通項が認められるからである⁵⁸⁾。問題はその時期である。ヴァニナの人物像を下敷きにマチルド像の原型が造られたのは、おそらく「マルセイユ草稿」の制作段階においてではあるまいか。

では、ここで『ヴァニナ・ヴァニニ』の制作を概観しておこう。ルイ・アラゴンはこの短編の源泉が『ローマ散歩』で言及されるリヴァローラ枢機卿暗殺未遂事件であることを指摘したが、その際に挿話が後者の原稿から切り離された理由としてスタンダールの炭焼党に対する著しい共感を挙げている⁵⁹⁾。これはガイドブックというテキストの性格にそぐわず、したがってより巧妙に作者の政治的な考えを投影できる小説形式が選ばれたのだと思われる。『ローマ散歩』は当初の予定より3カ月ほど遅れた9月5日、ドゥロネー書店より刊行された⁶⁰⁾。長びいた校正期間中に原稿の再構成が行われたことは、スタンダールがアンリ・シメオンに宛てた書簡に窺い知れる。7月23日付の手紙のなかで作家は、「ルヴェ・ド・パリ」誌に掲載されたシメオンの記事の『ローマ散歩』への引用許可を求め、署名の扱いについて尋ねているからである⁶¹⁾。しかも25日の正午までに返事があれば、夕方の印刷に間に合うと書かれている。シメオンの記事が引用されたのが第2巻目の終わり近くであることを考えるならば、6月から続けられていた校正作業はすでに全体的な構成にまでおよんでいたのは確実である⁶²⁾。となれば、『ヴァニナ・ヴァニニ』の源泉となる挿話が『ローマ散歩』から切り離されたのも、ほぼこの頃だと推定できるのではある

まいか。8月24日、スタンダールは『バイロン卿の思い出』と題された草稿をコロニに送っているが、その際に『ローマ散歩』の仕事がすでに自身の手を離れたことを報告している⁶³⁾。

『ヴァニナ・ヴァニニ』の原稿作成の時期にかんしては、9月8日の南仏・スペイン旅行の出発前に、「ルヴュ・ド・パリ」誌掲載のための原稿が作成されたとは考えにくい。原稿送付の日付は12月2日、掲載が12月13日だからである。『ヴァニナ・ヴァニニ』を皮切りにしてスタンダールは、『イタリアにおけるバイロン卿』『箱と幽霊』などの作品を「ルヴュ・ド・パリ」誌につづけて発表している。『イタリアにおけるバイロン卿』の内容が8月作成の『バイロン卿の思い出』に加筆・修正されたものである点から考えて、やはり『ヴァニナ・ヴァニニ』のばあいも同誌主宰者ルイ＝デジレ・ヴェロンに原稿が手渡される直前、すなわち11月中に既成の草稿に手が加えられて清書原稿が作成されたと推定できよう。

すでに『ローマ散歩』の校正段階で『ヴァニナ・ヴァニニ』の物語の核をなすヒロイン像の輪郭はできていたはずだ。おそらくはマルセイユで「アイデア」をえた時点において、ローマ社交界の花形という公爵令嬢ヴァニナの人物像はスタンダールの想像的次元においてマチルドの原型となったはずである。「マルセイユ草稿」の執筆ではヴァニナの人物像をなぞるようにして、パリの侯爵令嬢の性格と行動の最初のアウトラインが描きだされたにちがいない。ところで松原雅典は炭焼党という主題との関連から、ヴァニナの人物造型の際にスタンダールがマチルデ・デンボウスキーを想起した可能性を示唆しているが⁶⁴⁾、じっさい『ローマ散歩』の校正と時期を接して執筆された『バイロン卿の思い出』の冒頭には、彼女についての暗示的な言及が認められる⁶⁵⁾。そうだとすれば、マチルデの名前がヴァニナの人物像を媒介にして『赤と黒』のヒロインの名前に移しかえられたのは、「マルセイユ」草稿の作成過程においてだとは考えられまいか。

1830年1月、このマチルド像の原型に肉付けするうえで触媒となる現実のモデルが登場する。マリー・ド・ヌーヴィルの駆落ち事件である。作家は、18才の彼女が幼馴染みに肉関係を強要し、ロンドンに駆落ちするにいたる顛末をプロスペル・メリメから知らされた。ヌーヴィル嬢がマチルドの人物造型に大きな役割を果たしたことは、翌年1月17日付のマレスト宛書簡に明らかで

ある——「この結末は、書きながらいいと思っていました。大好きな美少女、メリー〔マリー・ド・ヌーヴィル〕の性格を思い浮かべていたのです。メリーだったなら、そのように行動しなかったかどうか、クララ〔メリメ〕に訊いてみてください」⁶⁶⁾。つづけてスタンダールは、意志の欠如した同時代の貴族青年をモデルにしたばあい平板な結末をまぬかれえないばかりか、7月革命における彼らの無気力な姿こそがマチルドという「例外」を創るきっかけだったと述懐している。換言するならば、創作のコンセプトにおいてヒロインの人物像は、その存在じたいが現実社会の批判となるように想定されたわけである。これが主要な主人公たちに共通する特徴であり、スタンダールの創造の要諦であるのはいうまでもない。

このマレスト宛の手紙の重要性は、マチルドのモデルを示す点だけにとどまるものではない。作家の言葉を信じるならば、ヒロインの本格的な造型はメリーという性格上のモデルに多くを負っている以上、まちがいがなく1830年1月以降である。だが書簡の文面から判断するならば、7月革命を契機にしてマチルド像が「例外」的な存在にいつそうふさわしく形象化されたということになる。つまり同書簡は、第2部の創作のクロノロジーを解明する上でも重要な手がかりでもあるのだ。かかる作家の証言の真偽を問う前に、はたして問題の時期にそのような修正が可能であったのかどうかを検証しておこう。

『赤と黒』が出版に至るまでの過程は、次の3つの段階を経たと思われる。まず清書原稿の作成。1830年4月8日のルヴァヴァスール書店との契約に先立って全体の草稿が提示されたはずである。というのも、これをもとに書店側は契約書に巻数の見積もりをたてているからだ。契約後、全体の清書原稿の作成が行われ、原稿は仕上がり次第、逐次送られている⁶⁷⁾。次に第1部の校正である。これは5月10日から6月下旬までつづけられたはずだ。校正作業に並行して第1部の各章の題とエピグラフが考案されている。そして最後が第2部の校正である。「『ジュリアン』の第2巻目」という覚書きの日付が6月22日となっているので、この日をさかいに校正は第2巻目に入ったと推定されよう⁶⁸⁾。一カ月後の7月22日、フィレンツェの友人ヴィウスー宛の手紙には、「あなたに『赤と黒』と題された小説を9月に送ります」という記述があることから、作業は順調に進み、出版までの見通しもついていたはずだ⁶⁹⁾。しかしながら以後の経過については実に不可解だといわねばなるまい。同年11月の

ルヴァヴァスール宛の手紙に明らかなように、11月に至ってもまだ第2部は校了してはいないのだ⁷⁰⁾。この2カ月にも及ぶ遅れは、7月革命の影響による印刷所の作業の一時的な停滞や作家自身の求職活動などを考慮しても理解しがたい⁷¹⁾。第2部の校正だけで4カ月強。第1部の倍の時間を要したことになる。しかも11月付のルヴァヴァスール宛の書簡に読めるとおり、著者自身の手によって校正を完遂できていないのだ。

第2部の校正が長期化した理由は、物理的な障害を除けばただひとつしか考えられまい。速筆で知られるスタンダールであるが、マルチノが推測したように、『赤と黒』の校正過程においては字句の修正にとどまらず、校正刷に多量の加筆が行われたのではあるまいか⁷²⁾。たしかに、「マルセイユの草稿はあまりにも短かったので、『赤』を印刷する間に内容を増やさなければならなかった」という『リュシアン・ルーヴェン』の余白メモを思い起こすならば、4月12日から4月末にかけての第2部清書原稿の作成中にかなりの分量の加筆が行われたはずだ。おそらくはこの時期、密書事件の挿話なども盛りこまれた。しかしながら4月の清書原稿どおりに校正が進まなかったからこそ、前述の遅れとなったはずである。となれば清書原稿の作成時だけでなく、校正作業中にもそうした加筆が行われたとしか考えられまい。じっさいその蓋然性の高さは、第1部・第28章のブザンソンの大聖堂の挿話という実例によって示されている⁷³⁾。ほぼ第28章全体を占めるこの挿話は、第1部の校正がかなり進んだ段階で新たに口述筆記されたのである。

このような『赤と黒』の校正作業の特徴を念頭においたとき、マチルドの人物造型についてのスタンダールの述懐はいっそう真実みを帯びてくるのではあるまいか。7月27日から29日にかけての民衆蜂起は第2部の校正作業中にあたるのだが、この直前の25日に第2部・第7折の活字が組まれている⁷⁴⁾。これは第2部・第8章の終わりから第9章の冒頭までに対応する。同箇所初校の刷り出しは革命の影響で滞り、8月4日になっている。4月下旬に清書原稿が作成され、また第2部の校正が開始されてからすでに1カ月以上たっている点から考えて、この時期にまだ第7折の組版ができていないのは実に奇妙だ。同部分の原稿は、第1部・第28章の前例から推察できるように、この時期になってあらたに作成された可能性が強い。

興味深いことに、内容の点から見ても第2部・第8章は先行する章と異なる

特徴をそなえている。第2部・第7章までは語りはつねにジュリアンを中心に物語の展開を追っていた。だが第8章以後、ジュリアンに対する関心といったマチルドの思考内容がクローズアップされはじめるのである。つまり7月革命の直前、第8章の原稿を作成するにあたってスタンダールが、マチルドの人物像を膨らませようと腐心していたのはあきらかだ。このような時期に7月革命が重なったのならば、前掲のマレスト宛書簡の証言のとおり、ヒロイン像に状況に想をえた特徴を加味したとしてもなんら不思議はあるまい。

第7折以後、校正は順調に進んだようである。8月11日には、第11折（第13章末から第14章の冒頭までに相当）の初校の校正が終わっている⁷⁵⁾。革命のため印刷所が混乱した7月26日から8月3日までの9日間、第8折から第11折にかけての原稿が新規に作成されたのかどうかは資料の現状からは断定できない。だが、すくなくともこれらの初校への加筆は充分にありうる。興味深いことに、マチルドの視点から同時代の貴族青年に対する否定的な評価がはじめて登場するのは、第2部・第8章の後半である——「この連中ほどつまらない人々があるかしら。このクロアズノアは私と結婚したがっている。やさしくて、丁寧で、ルウヴレーさんもこの人もお行儀は満点だ。あれで退屈さえなければほんとうにいい人たちなのだけれど〔…〕」[273]。革命後に校正された第9章以降、マチルドの態度はいっそう辛辣な調子を増す。たとえば、第2部・第11章で貴族青年たちの恋文が話題にのぼる際、前景を占めるのは次のような彼女の批判である——「これ以上無味乾燥なものってあるかしら。〔…〕帝政時代には、もっと勢いのよい文章だったにちがいないわね。あのころの上流の青年たちはみんな、じっさいに偉大な行為を見たか、自分でやったか、どちらかですもの」[294]。第8章では「退屈さ」において非難されていたのが、第11章では英雄主義的な観点から糾弾されているのである。注目すべきことに、「ダントンになるか」と題された第12章では、ありうべき革命下において貴族の若者たちがどのような振る舞いを見せるのかという点にまで批判は及んでいる——

「ほんとうに。革命がまた起こるかもしれない。そうなったら、兄さんやクロアズノア侯爵はどんな役割をつとめるのだろうか。はじめから分かりきっている——崇高なる諦め。ひとことも言わず首を刎ねられる悲壮な羊になるのだ。死に際まで悪趣味になりはしまいか、そればかり気にしている。あたしのジュリアンなら、少しでも逃れる望

みがあると見たら、捕縛にきた急進党の連中をピストルで撃ち倒すだろう。悪趣味なんか恐れはしない、あの人は」[298]

引用箇所を含む第11章が7月革命後に校正された点を考えるならば、ここでの「革命」についての言及には、もちろんスタンダールの予見ではなく現実をふまえた認識を読みとるべきであろう。ヒロインの考えのなかで否定的に示されている、「革命」下での貴族青年の諦念は、前掲のマレスト宛書簡のなかで述べられたスタンダールの批判と見事に符合する。このように校正時期と記述内容の点から、この部分が7月革命後に加筆されたことが看取されるのである。したがって『赤と黒』第2部の校正作業が大幅に遅れた一因として、7月革命という事件により作家があらたな着想を得て少なからぬ修正を校正刷に加えた可能性を挙げたとしてもけっして不当ではあるまい。

ところで同書簡によれば、マリー・ド・ヌーヴィルの性格を念頭に結末部分のヒロインの行動が創出されたことになる。物語の終わりでマチルドの人並はずれた意志の力を象徴するのは、いうまでもなく処刑されたジュリアンの首をめぐる彼女の一連の行為にほかならない。「ボンファス・ド・ラ・モールとマルグリット・ド・ナヴァールの思い出が、おそらくマチルドに人間以上の勇気をあたえた」[488]とあるように、例外者マチルドを可能ならしめたのはマルグリット・ド・ナヴァールに対する畏敬にほかならず、それは人物設定の面においてジュリアンのナポレオン崇拜と対をなすものである。これによって彼女の存在は、テキストの英雄主義的な次元において主人公の真の対応物になるといっても過言ではない。

では、いったい何時、結末部分の創作は行われたのであろうか。もちろん、ヌーヴィル嬢という実在のモデルがあってはじめて成立したわけだから、1830年1月以降であるのはまちがいない。前掲マレスト宛書簡の証言のとおり、7月革命が例外者としてのマチルド像を形象化する契機だったのならば、結末における問題箇所の創作も革命以後であるはずだ。当然ながら、ボンファス・ド・ラ・モールとマルグリット・ド・ナヴァールの史実に由来しているヒロインの家名などの設定もかかる着想と同時に採用されたと考えねばなるまい。となれば、革命以後のテキストへの加筆・修正などの作業は著しいものとなってしまいが、はたしてそのようなことがありえたのだろうか。すでに見たように

時間の面ではけっして不可能ではない。テキストの量的な側面においても、相当な加筆が行われた事実が裏づけられる。1830年4月8日にスタンダールがルヴァヴァスール書店と交わした契約書では、12折版の巻数は4巻となっていた。ところが刊行時に巻数は6巻に増えたのである。

7月革命後から8月11日までに第8折から第11折までの校正が行われた。そのなかには「王妃マルグリット」と題された第2部・第10章も含まれる。刊行テキストにおいて本章のもつ役割は、マチルドのマルグリット・ド・ナヴァール崇拜を主人公の視点を介して読者に明らかにすることであり、最終章でのマチルドの行為の伏線といえるであろう。時期的にみてスタンダールが7月革命の「着想」をこの章の校正に反映させることは充分可能であったはずだ。しかも第7折がそうであったように、つづく第12章までもこの時期になって組版されたのだとしたらどうであろうか。

さらに興味深いのは第2部最終章の創作時期である。11月に入っても第2部は校了せぬまま、テキストは刊出にむけて印刷に付されてしまう。注目すべきことに作者側の時間切れを反映してか、第2部最後の4章にだけ章題とエピソードが欠如しているのだ。そのなかにはもちろん、恋人の首を抱くマチルドの姿が描かれる最終章も含まれる。7月下旬に第2部の原稿が仕上がっていたのならば、その後の校正の日程から考えて、これはきわめて不可解な現象だといわねばならない。しかも11月付のルヴァヴァスール宛書簡でスタンダールは、「もう校正刷を直す気がしません」と⁷⁶⁾、校正の放棄を伝えているばかりではない。さらに、「マチルドの妊娠を和らげるために筆をもちたいと望んだりなどするものですか」とあるように、お腹の大きくなる彼女の姿、すなわち物語のつづきをこれ以上書きたくない旨を表明しているのだ。これらの点を考えあわせるならば、第2部の最終4章が校正作業の最終段階で創作された可能性はあながち否定できないのである。

マチルド像に修正が加えられた動機としては、スタンダールがヴァニナの人物像に満足していなかった点が挙げられる。『ヴァニナ・ヴァニニ』は刊行後まもなく一部の知人たちによって批判された。それが作家にとって少なからず骨身に届いたことは、ほぼ同内容のメモが異った5冊の本に1830年1月5日付で残されている事実に明らかであろう⁷⁷⁾。しかも、ほかならぬヌーヴィル嬢が批判者に含まれるのだ——「メリー〔マリー・ド・ヌーヴィル〕は、ヴァニ

ナ・ヴァニニの行動がとるに足りないものと言った」。『赤と黒』で新しく例外的なヒロイン像を創り出すにあたって、スタンダールが批判の対象となった枠組みをそのまま踏襲して満足するはずがあるまい。アマゾン型の女性を体現するヌーヴィル嬢であればこそ、その批判が作家にとっていかに説得的であったのかは容易に推察できる。また、だからこそ当の批判者の性格を思い描きながら、結末部のマチルドの行動を形象化したのではなかったか。こうした経緯は前掲マレスト宛書簡の証言内容を理解するために不可欠なコンテキストであろう。と同時に『赤と黒』の創作にかんして、ヒロイン像の造型を発展過程として展望する必要を我々に示唆してくれる。換言するならば、マチルド・ド・ラ・モールはけっしてヴァニナ・ヴァニニの同水準の変奏として彫琢されたのではないのである。

7月革命がヒロイン像修正の契機になったという事実は、最終章における彼女の行動について解釈の点でも見過ごせない意味をもつ。1828年10月にベルテ事件を知ったスタンダールは翌年3月末、「ガゼット・デ・トリビュノー」紙、ならびに「クーリエ・デ・トリビュノー」紙上でラファルグ事件の訴訟報告を目にしたと推定されている。これを契機にアドリヤン・ラファルグの人物像とベルテ事件の提供する物語の枠組みとが融合し、ロマン・コロンの証言するように1829年5月頃、『ジュリアン』と題された最初の草稿が書かれたと今や考えることができよう。興味深いのは、この当時、公衆の面前で行われる処刑をめぐり知識人のあいだで議論が活発化していたことである⁷⁸⁾。大革命の流血を象徴するギロチンは、王政復古期においても依然として大衆の残虐さへの嗜好を満足させていた。このような公開処刑のスペクタクル的な側面を最も警戒したのは、ほかならぬ刑の執行者、復古王政政府である。革命の大虐殺の記憶を払拭すべく、さまざまな行政的な活動を通じてあらゆる血なまぐさい光景が公の場から遠ざけられていく。こうした社会秩序を維持する努力はルイ・フィリップの治世下になっても継続される。1834年に断頭台はグレーブ広場を離れて郊外のサン＝ジャック市門に移されてしまい、処刑は人知れず行われるようになるのである⁷⁹⁾。

このような当局の思惑にはからずも添うようなかたちで登場したのが、1829年2月7日にゴスラン書店から匿名で刊行されたヴィクトル・ユゴーの『死刑囚最後の日』である。死刑廃止を訴える同書に対してスタンダールの反応は早

かった。2月10日付のアルフォンス・ゴンソラン宛の書簡のなかで、『死刑囚』にはぞっとさせられました、『ヴィドックの回想録』のいくつかのページには劣るように思われます」と感想を述べているように⁸⁰⁾、かかる主題に対してきわめて強い興味を示しているのである。さらに同じ年の5月2日、ジュール・ジャンンの『死んだ驢馬とギロチンにかけられた女』が匿名で刊行される。同書は流行していた暗黒小説のパロディであるが、絞首刑になった人物の回想などが盛りこまれているように、『死刑囚最後の日』の主張を揶揄するような側面も有している⁸¹⁾。スタンダールが当時親交のあったジャンンの小説を読んだことは、6月付のアンスロ夫人宛書簡から明らかであろう⁸²⁾。これら死刑囚の物語にスタンダールがいち早く関心を示した事実は、時期を接して着手された『赤と黒』の仕事ともけっして無関係ではあるまい。このような文学的な状況を考慮するならば、主人公の処刑の情景をいかに形象化すべきか、という問題は当然ながら執筆当初から強く意識されたはずだからである。暴力や流血を売り物にする暗黒小説やメロドラマに対する批判的な姿勢では、ユゴーやジャンンもスタンダールとさほど違っていたわけではない。だがスタンダールのばあい、スペクタクル的な要素を徹底して排除するという点で彼らとは明らかに異なる戦略を選択したのである。牢獄から断頭台にいたる過程においてジュリアンの内面に叙述の焦点が絞られ、処刑の光景にいたっては具体的な描写はいっさい退けられる。処刑の瞬間、提示されるのは苦痛や恐怖ではなく、追憶にひたる主人公の「詩的な」意識にほかならない⁸³⁾。

では『赤と黒』の残酷さを排除した叙述は、時の政府による秩序維持の戦略に通じるものなのであろうか。むろんそうではあるまい。7月革命がマチルドの人物設定を変更する契機となったように、革命による着想は他の要素にも反映されている。たとえばダントンの言及にそうした一例を認められまいか。大革命の立役者の名がテキストに初めて登場するのは第2部・第9章であり、この部分はすでに検討したように革命後に初校の校正が行われている。しかも注目すべきことに、つづく第10章と第12章、すなわちマルグリッド・ド・ナヴァールの名前が頻出する章においてもダントンの言及が認められるのだ⁸⁴⁾。このように2者の名が同箇所でも出現している事実は、第2部の創作過程についての我々の推定の裏付けにもなるであろう。それはともかく、ダントンの名が引きあいにもだされる意図は明らかで、ジュリアンの死に大革命の英雄の

最後を重ね合わせて提示する仕掛けにはほかならない。それを証するのは第2部・第42章である。この章は題とエピグラフをもたない前述の4章のひとつであるが、ギロチンからの連想で主人公の脳裏に浮かぶのは、やはりダントンの偉業なのである——「ダントンは断頭台に上がりかけたとき細君のことを思い出して心が乱れたようだ。しかしダントンはとにかくやくざな青二才ばかりかたまっていた国に力をあたえ、敵がパリに迫るのを防いだ男だ」[468]。このように見てくるならば、暗黒ジャンルとは対極の、残酷さを排除し内面に焦点化された叙述が採用されたのは、ダントンに比肩しうる主人公の最後を英雄主義的な次元において際立たせる手法だといえまいか。もはや明らかであろう。革命の精神を称揚するスタンダールのテキストは、その目的において復古王政政府の戦略の対極に位置づけられるべきものだ。したがって王妃マルグリッドに倣うマチルドの姿を理解するためには、ポニファス・ド・ラ・モールが国王に反抗した、「その時代の英雄」[289]であったという点もけっして見逃してはならない。外見上は狂信的なマチルドの行動には、「反抗者」の死を悼む最上の儀式を読みとることができるのである。

結 語

『赤と黒』にかんして残された証言や覚書きを検証しながら、創作過程のクロノロジーについてその再構成を試みた。作家がベルテ事件を知ったのは1829年秋と推測されてきたが、我々は『アンリ・ブリュラーの生涯』で言及される1828年のグルノーブル滞在に遡ると考える。この代替説にもとづいて資料を読みなおすならば、これまで等閑に付されてきたいくつかの証言内容を再評価せざるをえまい。草稿制作の時期について、1829年の春とするロン証言の信憑性は疑えない。そればかりか、従来最も重要視されてきた1829年の「『ジュリアン』のアイデア」とは、作品全体の最初の構想ではなく、既存の草稿の修正を意味することはもはや明らかであろう。これを第2部の制作にかかわる「アイデア」とし、テキスト制作の過程を素描したが、なかでも第2部の校正における7月革命の影響は看過できない。革命を契機にしてマチルド・ド・ラ・モール像の造型や結末部分の創作を中心に、〈革命〉の英雄主義的な側面がテキストに反映されたのである。結末が同時代文学の潮流のなかで

異彩を放つのも、変動する政治・社会に対する作家のきわめて強い関心と切り離して考えることはできないのだ。このように『赤と黒』の制作過程を俯瞰するならば、スタンダールは時代の流れを見極めながら、あたかも画家が絵具を塗り重ねて作品の完成に向かうように、制作の最終局面に至るまでたゆまず変更を加えつづけた、そう結論づけてさしつかえあるまい。

註

- 1) 『赤と黒』のテキストにはガルニエ新版 (STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*. Texte établi avec sommaire biographique, introduction, bibliographie, variantes, notes et dossier documentaire par Pierre-Georges CASTEX, Paris: Bordas, coll. «Classiques Garnier», 1989) を用いる。同版からの出典はページ数を [] 内に示す。なお、訳出・引用には人文書院『スタンダール全集』収載の邦訳 (『赤と黒』, 桑原武夫・生島遼一訳, 1977年) を使用するが、文脈によっては筆者が改変をほどこしたところがある。
- 2) STENDHAL, *Journal*. Texte établi, annoté et préfacé par Victor DEL LITTO, in *Œuvres complètes*. Nouvelle édition établie sous la direction de V. DEL LITTO et Ernest ABRAVANEL, Genève: Cercle du Bibliophile, 50 vol., 1967-74, t. XXXII, p. 45.
- 3) Voir Robert VIGNERON, *Études sur Stendhal et sur Proust*. Avant-propos de René JASINSKI, Paris: Libr. Nizet, 1978, p. 90.
- 4) Voir Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*, Paris: Le Divan, 1950, p. 242; CASTEX, «Introduction», in *Le Rouge et le Noir*, op. cit., p. XVI.
- 5) STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor DEL LITTO, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1981-82, t. II, pp. 105-106.
- 6) Voir Kosei KURISU, «Stendhal et la Gasette des Tribunaux», *H.B. Revue internationale d'études stendhaliennes*, n° 3, 1999, pp. 143-147.
- 7) Voir Daniel LANGLOIS-BERTHELOT, *Le Maître-Calendrier*, Chambéry: Impimeries réunies de Chambéry, 1975, pp. 24-25.
- 8) Voir CASTEX, «Introduction», in *Le Rouge et le Noir*, op. cit., pp. XVI-XVII.
- 9) シャロンを発ったスタンダールがグルノーブルへ向かうルートをとったとは考えにくい。作家の友人アドルフ・ド・マレストは1818年9月12日付の手紙のなかで、グルノーブルからオーブ県のトロワへ向かうクロゼ夫妻が途中リヨンからシャロン

- まで航路で北上したことを伝えているが、作家も同様のルートでパリへ向かったのではあるまいか。Voir STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO, avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E SLATKINE, Paris: Libr. Honoré Champion, 6 vol., 1997-99, t. III, p. 150.
- 10) Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. XXXII, p. 45; STENDHAL, *Journal littéraire*. Texte établi, annoté et préfacé par V. DEL LITTO, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. XXXV, p. 175.
- 11) ヴィニユロンは1829年12月3日まで作家がアルベルト・リュバンプレやマレストに会っていないという事実から、その前日にパリに戻ったのではないかと推定している (voir VIGNERON, *op. cit.*, pp. 90-91)。『パルムの僧院』執筆中の作家の蟄居生活についてはモンチホ伯爵の次女ウージェニアの証言がある——「ベール氏は消えてしまいました […] 誰に対しても自分は狩りに出かけていると伝えるように門番に命じたのです」 (voir MARTINEAU, *op. cit.*, p. 351)。
- 12) マルセイユ滞在前にスタンダールがグルノーブルに立ち寄ったとするマルチノの推定に対して、カステックスは同説を無根拠であるばかりか地理的に見てもありそうにない旅程だと批判しているが、この点にかんしては我々も同意見である (voir CASTEX, «Introduction», in *Le Rouge et le Noir*, op. cit., p. XVII)。興味深いことにマルチノは1952年刊行のプレイアッド版の序文ではスタンダールが1828年9月末から10月15日にかけてスペイン・南仏旅行をしたのではないかと自説を修正している (voir Henri MARTINEAU, «Préface», in *Romans et Nouvelles de Stendhal*. Édition établie et annotée par H. MARTINEAU, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1948-52, t. I, p. 197)。
- 13) Voir STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, pp. 567, 614 et 635.
- 14) Voir VIGNERON, *op. cit.*, pp. 84-87.
- 15) Pierre MAES, *Un ami de Stendhal, Victor Jacquemont*, Paris: Desclée de Brouwer et Cie, 1925, p. 332.
- 16) Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, p. 136. 当時の郵便馬車はさまざまな改良のおかげで「稲妻の速さで旅をする」と呼ばれるほど速かった (voir Bertier de SAUVIGNY, *La Restauration*, Paris: Flammarion, coll. «L'Histoire», 1955, p. 275)。
- 17) Voir Lily R. FELBERG, *Stendhal et la question d'argent au cours de sa vie*, Aran: Éd. du Grand-Chêne, «Collection stendhalienne 19», 1975, pp. 51-52.
- 18) Voir VIGNERON, *op. cit.*, p. 85.
- 19) Voir STENDHAL, *Chroniques pour l'Angleterre. Contributions à la presse britannique*. Textes choisis et commentés par K. G. McWATTERS. Traduction et annotation par René DÉNIER, Grenoble: Publications de l'Université des

- Langues et Lettres de Grenoble, 1980-95, 9 vol., t. VII, pp.180-195.
- 20) Romain COLOMB, *Notice sur la vie et les ouvrages de Henri Beyle (de Stendhal)*. Texte annoté et préfacé par V. DEL LITTO, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. XLIX, p. 276.
- 21) ヴィクトル・デル・リットはコロンの語るドフィネ旅行が1824年ではなく、1829年に行われたのではないかと推定している。Voir DEL LITTO, «Notes et éclaircissements», in *ibid.*, p. 411.
- 22) STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, p. 679.
- 23) Voir DEL LITTO, «Notes et variantes», in *ibid.*, pp. 1355-1356.
- 24) STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, pp. 613-615. もちろんクレでの思い出は幸せなものばかりではない。作家の精神生活におけるクレの位置づけについては次の論考を参照——Philippe BERTHIER, *Espaces stendhaliens*, Paris: PUF, coll. «Écrivains», 1997, pp. 19-25.
- 25) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. I, p. 15.
- 26) STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, p. 778.
- 27) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. IV, pp. 240-241. また同年9月14日付ドメニコ・フィオール宛の書簡では8月11日付の書簡を話題にしながらい度は自らを「baron Raisin」という偽名で呼んでいる (*ibid.*, p. 243)。この時スタンダールはブドウを食べながら手紙を書いていたのだろうか。ジグリオ島産のブドウを窓から海に投げ入れていると述べている。
- 28) Voir François MICHEL, *Fichier stendhalien*, présenté par Jean FABRE, Victor DEL LITTO et James F. MARSHALL, Boston: G. K. Hall, 1964, 3 vol., t. I, p. 22. 同書のなかでミシェルは、アリベールの息子がスタンダールについてブドウの逸話だけを記憶していたと報告している。
- 29) 今日では宅地化のためにクレの風景から葡萄畑がだんだんと姿を消しつつある。スタンダール資料館のマリー＝テレーズ・アンベル女史からいただいた私信によると、クレでのブドウの収穫は秋、とりわけ9月に行われるとのことである。したがって収穫のシーズンは遅くとも10月初旬までであろう。
- 30) Voir Jacques FÉLIX-FAURE, *Un compagnon de Stendhal. Félix-Faure, pair de France*, Aran: Éd. du Grand-Chêne, «Collection stendhalienne 21», 1978, pp. 119-121.
- 31) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p. 666.
- 32) STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, p. 635. この記述のなかでスタンダールは「1828年夏」としている。とはいえ同書の第9章ではクレでの夏の休暇について、通常ならば「8月と9月」と記述すべきところを「9月と8月」と記している点や、前掲ポーリーヌ宛書簡の日付が9月28日である点などを照らし合わせるならば、ベール家の休暇の時期は主に9月であったと考えられる。したがって後年作家が9月末から10月初旬の滞在を夏と記述したとして

もそれほど奇妙ではあるまい。

- 33) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p. 668.
- 34) Voir FÉLIX-FAURE, *op. cit.*, pp. 129-130. 1829年夏のラ・ファイエットの周遊の日程については以下を参照——Étienne TAILLEMITE, *La Fayette*, Mesnil-sur-l'Estrée: Fayard, 1989, pp. 478-480. ところで、1829年8月20日付の書店主ドゥロネー宛書簡の存在やアンソロ夫人からの8月29日付の書簡の記述から考えて、グルノーブルでの歓迎晩餐会の頃、スタンダールはパリにいたと思われる。Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p. 729.
- 35) Voir FÉLIX-FAURE, *op. cit.*, p. 131.
- 36) Voir *ibid.*, p. 122. ちなみに『アンリ・ブリュラルの生涯』第42章には1829年にスタンダールがフォルと会ったことを示す記述がある——「ホウレン草とサン＝シモンは私の唯一の長続きのする嗜好である。パリで100ルイの年収をえて本を書いて暮らす、ということを除いては唯一の嗜好である。1829年にフェリックス・フォルは、1798年に私がそう彼に言っていたと注意してくれた」(STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *Ceuvres intimes*, op. cit., t. II, p. 931)。しかしこの記述のどこにも会見の場所がグルノーブルであるとは書かれていない。忘れてはならないのは、スタンダールが代議院議員となったフォルと1829年にはパリで会う機会が少なからずあったという点である。当時の代議院議会の会期は6カ月であり、年末(11月から1月)に始まって遅くとも7月には閉会していた(voir SAUVIGNY, *op. cit.*, p. 394)。つまり2者が会期中にパリで会うことは可能だったのである。じっさい1829年2月9日付のエドゥアル・ムーニエ宛書簡は作家の就職問題で両者がなんらかの接触をもっていたことを窺わせる。
- 37) スタンダールの求職にかんしては、鈴木昭一郎「年譜、スタンダールの生涯——その日々の生活・読書・思索・創作の軌跡——」、『スタンダール研究』、白水社、1986年4月、280頁参照。
- 38) Voir FÉLIX-FAURE, *op. cit.*, p. 120. フォールがスタンダールの住所を知らなかったはずはない。2月22日付フォル宛の前掲書簡以後、作家の住所は1828年中は変わっていない。また同年7月21日には、1788年7月21日のヴィジーユ会議の40周年を記念する集会在パリで催されているが、おそらくこの晩餐会での2人の再会はありえまい。スタンダールが出席したことは次のメモから推測できる——「ヴィジーユの晩餐。エドゥアル・ムーニエ、オーギュスタン・ペリエ氏の返答、ラ・ファイエット将軍。フランスの愛国者の臆病さ。滑稽になることを怖れている。彼らにはリーダーが必要だ」(STENDHAL, *Journal*, in *Ceuvres intimes*, op. cit., t. II, pp. 98-99)。これに対してフォルの方は参加を見合わせた可能性が高い。当時の警察の報告によれば、ドフォネ出身の自由主義者や共和主義者たちによるこの晩餐会に当初は200名をこえる参加の申し込みがあったが、ラ・ファイエットに代表される共和派の参加が公になるや会食者たちの半数以上が出席をとりやめているからである(voir François MICHEL, *Études stendhaliennes*. Deuxième

- édition augmentée présentée par Victor DEL LITTO, Paris: Mercure de France, 1972, p. 226)。ロワイエ＝コラルの派に属するフォールはラ・ファイエットに対して距離をおいていた。このことは1829年8月、ラ・ファイエットのグルノーブル来訪におけるフォールの対応に明らかだ (voir FÉLIX-FAURE, *op. cit.*, pp. 126-130)。
- 39) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. III, pp. 709-710.
- 40) Voir *ibid.*, p. 693. この書簡に先立ってスタンダールは同年7月15日、当時国務院評議院で宮内省国璽係だったパストレに就職先の紹介を依頼していた (voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, *op. cit.*, t. II, p. 98)。結局パストレの紹介でスタンダールがえたのは無給の名誉職のみ。ところで興味深いのは、パストレの9月25日付の手紙が「もし貴兄が出発されていなければ、少々お時間をいただきたい」という文句ではじめられている点である。おそらくパストレはスタンダールから旅行の計画を事前に知らされていたのではあるまいか。
- 41) 場合によってはフォールがベルテ裁判の審判を担当していたのかもしれない。というも当初の予定者リュック・ミシューが被害者との血縁を理由にその任を自ら忌避し、代わりにフォールを強く推薦したからである。そのような渦中にあったフォールが事件にまったく無関心であったとは考えにくい。Voir FÉLIX-FAURE, *op. cit.*, pp. 122-123.
- 42) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*, *op. cit.*, p. 666.
- 43) Voir KURISU, *art. cité*, pp. 143-144. 栗須公正は同メモに示された考えが『赤と黒』の創作にもかかわると指摘している。
- 44) Voir STENDHAL, *Chroniques pour l'Angleterre*, *op. cit.*, t. VII, p. 103.
- 45) COLOMB, *op. cit.*, pp. 316-317.
- 46) Voir CASTEX, «Introduction», in *Le Rouge et le Noir*, *op. cit.*, p. XVIII.
- 47) STENDHAL, *Une position sociale*. Texte établi, annoté et préfacé par E. ABRAVANEL, in *Œuvres complètes*, *op. cit.*, t. XXXVIII, p. 412.
- 48) STENDHAL, *Le Rose et le Vert*. Texte établi, annoté et préfacé par E. ABRAVANEL, in *Œuvres complètes, ibid.*, p. 327.
- 49) STENDHAL, *Lucien Leuwen*. Texte établi, annoté avec un avant-propos par Henry DEBRAYE. Préface de Paul VALÉRY, in *Œuvres complètes*, *op. cit.*, t. XII, p. 386.
- 50) STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*. Texte établi, annoté et préfacé par V. DEL LITTO, in *Œuvres complètes*, *op. cit.*, t. XXXVI, p. 86.
- 51) Voir CASTEX, «Introduction», in *Le Rouge et le Noir*, *op. cit.*, p. XVII.
- 52) 栗須公正によって解明されたように、第2部の密書事件の挿話の創作には1829年12月から1830年3月にかけての「立憲」紙をはじめとするジャーナリズムの影響が大きかった (栗須公正「『赤と黒』「密書」事件の研究——1830年の「密書」とは何か——」、『スタンダール研究』, 白水社, 1986年4月, 25-46頁参照)。小論の

考察にとって興味深いのは、ジャーナリズムとの関わりから考えて密書事件の挿話の執筆が1830年4月以前には不可能であったことだ。

- 53) Voir Jean PRÉVOST, *La création chez Stendhal*, Paris: Mercure de France, 1951, p. 269; voir aussi Maurice BARDECHE, *Stendhal romancier*, Paris: La Table Ronde, 1947, p. 208.
- 54) Voir René FONVIEILLE, *Le véritable Julien Sorel*. Préface de Vittorio del LITTO, Arthaud: Grenoble, 1971, p. 93; voir aussi *La Gazette des Tribunaux* (28, 29, 30 et 31 décembre 1827), in *Le Rouge et le Noir*, op. cit., pp. 657-658.
- 55) *Ibid.* pp. 722-723.
- 56) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. VI, p. 405.
- 57) Voir ABRAVANEL, «Préface» pour *Vanina Vanini*, in *Œuvres complètes de Stendhal*, op. cit., t. XXXVIII, pp. VI-VII.
- 58) ここで『ヴァニナ・ヴァニニ』と『赤と黒』の共通点について若干の補足をしておこう。公爵家に生まれた19才のヴァニナは、父親に匿われた炭焼党員ピエトロ・ミッシリッリと恋におちる。この点でジュリアンとマチルドのばあい同様、階級をこえた恋愛であり、ヒロインの父親の役割も類似している。ピエトロは祖国独立のために結社にもどるが、そのためにヴァニナは自分が捨てられたと思い、彼を取り戻すためにピエトロを除く他の黨員たちを密告してしまう。ピエトロは自分だけが助かるのを潔しとせず、自首して死刑の宣告を受ける。するとヴァニナは警視総監の屋敷に変装して忍び込み、恋人の助命をえるのである。手段や結末は異なるものの、恋人の減刑のために奔走する2人のヒロインの姿は重なり合う。両小説の共通項を図式化するならば、反=権力的思想をもつ恋人の死刑の宣告と投獄、変装したヒロインによる権力者への助命嘆願、成就しないヒロインの恋となる。興味深いことに『バルムの僧院』の後半部、投獄されたファブリスとサンセヴェリナ公爵夫人の関係にも同様のプロセスが認められる。これら3人のアマゾン型の女性が類似したドラマを演じているという事実は、『赤と黒』のテキストの構築のみならず、スタンダールの創造の想像的な次元での解明にとっても示唆的ではあるまいか。
- 59) Voir Victor DEL LITTO, «Préface», in *Armance de Stendhal*. Préface et notes de V. DEL LITTO, Lausanne: Éd. Rencontre, 1960, 18 vol., t. IV, p. 22. 挿話の短編化の背景としてアラゴンは、炭焼党への顕著な共感が『ローマ散歩』の評判を損なうのではないか、というスタンダールの危惧を挙げている。さらにデル・リットはアラゴンの推定を引用・紹介しながら、出版元の要望に応じて原稿段階で大部になってしまった同書を2巻におさめるために問題の挿話が切り離されたという説を述べている。
- 60) スタンダールがドゥルネーと交わした契約書では、1929年6月1日までに印刷を終えておく取り決めになっていた。Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p. 716.

- 61) Voir *ibid.*, pp. 727-728.
- 62) 6月21日付の覚書きには「恋と幸福のために校正できず」とあるように、1カ月以上前から『ローマ散歩』の校正はすでに始まっていた。Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. XXXII, p. 45.
- 63) 1829年8月24日付のコロン宛書簡では、「印刷所での少しの遅れと原稿の支障にもかかわらず、『散歩』は順調に進んでいるので、多分きみと同じ頃なりに、パレ＝ロワイヤルのドゥロネー氏の書店に届くだろう」と記されていることから、校正作業は8月下旬までつづいたと考えられる。Voir STENDHAL, *Journal littéraire*, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. XXXV, p. 411.
- 64) この点に関しては、松原雅典『スタンダールの小説世界』、みすず書房、1999年2月、167-169頁参照。
- 65) 問題の箇所は、「私は死んだ友人たちの非難も同じく心配することはない」というくだりである (STENDHAL, *Journal littéraire*, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. XXXV, p. 167)。この箇所についてデル・リットは「私はこれらの言葉に1825年に亡くなったマチルデ・デンボウスキーへの仄めかしを認める」と付註している (voir DEL LITTO, «Notes et éclaircissements», in *ibid.*, p. 411)。
- 66) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. IV, p. 19.
- 67) 清書原稿の作成を示す2つのメモが現存している。まず4月12日付のメモ——「私は第1巻目の清書原稿の最後を送る I send the end of the copy of the first volume」(STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, p. 128)。次に4月25日付のメモ——「180ぐらいまで『ジュリアン』を筆写する作業を4時間半した後で、ヴェロン氏に『箱』を送る」(*idem*)。両者を照らし合わせるならば、2つ目のメモで問題になっているのは第2部の清書原稿作成のための筆写と推定できよう。
- 68) Voir *ibid.*, p. 130.
- 69) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p. 770。ちなみにカステックスは我々と異なり、この頃に第2部の原稿が仕上がったと考えている。Voir aussi CASTEX, «Introduction», in *Le Rouge et le Noir*, op. cit., p. XVIII.
- 70) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p. 784.
- 71) 7月25日に活字が組まれた第2部・第7折の初稿が6月4日に出ているように、印刷所の作業の停滞はせいぜい革命前後のごく短期間と推測され、それが直接的な原因とは考えにくい。
- 72) Voir Henri MARTINEAU, *L'œuvre de Stendhal. Histoire de ses livres et de sa pensée*, Paris: Le Divan, 1945, pp. 328-329.
- 73) Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, pp. 129 et 1079.
- 74) 第2部・第7折の組版の時期を示す版元の註は次の通りである——「1830年7月25日組版のこのシートは6月4日に刷られた Cette feuille, composée le 25 juillet 1830, a été imprimée le 4 aout.」[275]。すでに見た『ローマ散歩』の校正

作業の日程から考えて、7月25日の午前中までに原稿が仕上げられれば活字に組めたと思われる。

- 75) Voir MARTINEAU, *L'œuvre de Stendhal*, op. cit., p. 329.
- 76) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p. 784.
- 77) Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, p. 117.
- 78) 当時ボナルドやジョゼフ・ド・メーストルが死刑制度を擁護する一方で、バランシュが死刑廃止を訴えるなど世論は二分されていた。
- 79) この点にかんしては、アラン・コルバン『時間・欲望・恐怖——歴史学と感覚の人類学——』（小倉孝誠、野村正人、小倉和子訳、藤原書店、1993年、253-266頁参照）。
- 80) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, pp. 710-711.
- 81) 『死んだ驢馬とギロチンにかけられた女』のもつパロディ的な側面にかんしては、以下の研究を参照——柏木隆雄「墓地からの光景——ロマン主義時代の文学的トボス——」、『フランス・ロマン主義と現代』所収、筑摩書房、1991年、10-12頁；ルイ・シュヴァリエ『労働階級と危険な階級』（喜安朗・木下賢一訳）、みすず書房、1993年、62-67頁。
- 82) STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p. 727. 当時スタンダールがジャンンと交際していたことが、1828年12月26日付のメリメ宛の手紙に窺い知れる——「私は文学においてあなたと、ドン・ミゲルとナポレオンの対話の作者、ジャンン氏しか認めていません。[...] もしお望みならば、あなたをジャンン氏に会わせましょう」（*ibid.*, p. 699）。また前掲した1830年11月付のルヴァヴァスール宛書簡のなかで、「あなたとジャンン氏と一緒に夕食をとる楽しみを諦めるのは、このうえなく残念な気持ちです」と記されているように、この頃まで交際はつづいていたようである。
- 83) ジュリアンの処刑への言及は次のとおりである——「くさあ、これで万事都合よし、おれは勇気を失っておらぬ」とジュリアンは思った。彼の頭はまさに落ちようとする刹那ほど詩的であったことは今までになかった。かつてヴェルジーの森で経験した楽しい瞬間の記憶がいちどきに、しかも極端な力強さをもって描かれたのであった」[487]。
- 84) ジュリアンとダントンの対比が最も顕著に行われるのは、「ダントンになるか」と題された第2部・第12章である——「くあんなに精力のある若者には気をつけたほうがいいよ」と兄が鋭く言った。くまた革命でもはじまったら、我々をみんなギロチンにおくってしまうにちがいない」[...] マチルドは彼らのそばを離れた。兄の言ったことがこわくて、ひどく不安になってきた。が、翌日になると、それが最上の賛辞のように思われるのだった [...] くあの人（ダントンになるだろう）」[298]。